

# 高校 実践事例 1

## 観点① 教育課程や教育活動の見直し

### 生徒主体で学び方を学ぶ、週1コマの「学びの アセスメント」で、生徒の自己調整力を高める 京都府・京都市立堀川高校

2022年度入学生から、生徒同士が学び方や学びのあり方について語り合う「学びのアセスメント」を、1年次に始めた。3年次には、自己調整しながら学習を進められるようになっていくことが目標だ。

自分で学ぶ力を育み、自らデザインした学びを実践できるように

『自立する18歳』の育成』を最高目標に掲げる京都市府・京都市立堀川高校は、2022年度入学生教育課程も、その目標の下で編成した。科目や内容の扱いに大きな変更があった国語科、地理歴史・公民科、数学科、情報科に関する情報を、校内で研修会を実施し共有した上で、各教科での対応を検討。例えば、「数学C」が大学入学共通テストの出題範囲となることも想定し、3年次に学校設定科目「数学演習」を設定した。また、授業時数は、これまでの週35単位時間

から、学習指導要領の総則に示された「週当たりの授業時数は、30単位時間を標準」を基準に検討した。

教育課程の編成過程では、学習の自己調整力をどのようにして育成するのかも検討した。飯澤功<sup>いゐざわ いくお</sup>教頭は、次のように説明する。

「1年次から生徒主体で探究学習や学校行事を行うことで、3年次には、自ら計画を立て、問題を解決しながら、活動を進めることができるようになります。ただ、そうした自己調整力を教科学習には生かし切れず、学力が伸び悩む生徒が少なくありませんでした。そこで、教科学習における学び方を学ぶ『学びのアセスメント』を、

1年次に設けることにしました」

検討の結果、1年次の総単位数は33単位とし、教育課程外に「学びのアセスメント」(図1)を週1コマ配置。2年次の総単位数は33単位、3年次は31単位で編成し、毎日7限まで授業を行っていたこれまでの教育課程に比べ、生徒が自分の望む学習をできる環境を整えた。

また、各大学の、25年度入試で課す教科・科目等に関する情報の公表を受け、校内で対応を協議。「情報I」については、22年11月に公表される大学入学共通テストのサンプル問題を踏まえて、3年次の夏季休業中の補習実施など、詳細を検討する予定だ。地理歴史・公民

#### 学校概要

設立 1908(明治41)年  
形態 全日制/普通科・人間探究科・自然探究科/共学  
生徒数 1学年240人  
2022年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、北海道大、東北大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、京都府立医科大、京都府立大、大阪公立大などに131人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ299人が合格。



副校長  
中村陸子  
なかむら りつこ  
教職歴33年。同校に赴任して13年目。



教頭  
飯澤功  
いゐざわ いくお  
教職歴18年。同校に赴任して19年目。



進路指導主事、企画推進部長  
滝本梨恵子  
たきもと りえこ  
教職歴18年。同校に赴任して13年目。理科(化学)。



1学年主任  
飯島弘一郎  
いゐじま こういちろう  
教職歴10年。同校に赴任して6年目。国語科。

科は、大学入学共通テストで「公共」と「政治・経済」または「公共」と「倫理」を選択できる大学が想定より多かったため、「歴史総合」及び

図1 「学びのアセスメント」概要

- ◎目的 ①個人として、自分自身の学びを振り返り、学習方法を自己調整する。  
②クラスとして、高みを目指し、学び合う学習集団をつくる。
- ◎実施日・時数 毎週金曜日の4時間目、年間26時間（予定）※教育課程外
- ◎実施教科・時数 国語科（年間10時間）、数学科（年間4時間）、英語科（年間10時間）、地理歴史・公民科（年間2時間）
- ◎進め方 使用する資料やプリントなどは、教師が用意。各クラスの教科系の生徒と担当教師が事前に打ち合わせをし、資料配布や説明などを行う進行役は、教科係が務める。



「学びのアセスメント」は生徒のみで進行。教師は、教室には入らず、廊下から見守る。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 「学びのアセスメント」年間計画（抜粋）

カリキュラム・ポリシーより（1年次）

**学習姿勢：**目標と目的を意識し、調整しながら謙虚に学ぶ。  
**なれる：**謙虚に学ぶ姿勢を持ち、作法を身につける。  
**たのしむ：**他者とかがわり、見聞を広め、知性を育む。

|    | 学年の様子   | 実施教科              | 学びのアセスメントで確認したいこと/気づかせたいこと   |
|----|---|-------------------|--|
| 4月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■探究 DIVE = 学問的興味を刺激し、学びに向かう意欲を喚起</li> <li>■課題テスト、キャリアパスポート</li> <li>■第1回学習状況連絡会（入学時の学力/学習状況の確認）</li> </ul> | 4/22 国語           | <ul style="list-style-type: none"> <li>• やればできるはずのことができているか認識する。</li> <li>• 自身に定着するためにかかる時間や方法を認識する。</li> <li>• 自分なりに計画を立てて臨み、うまくいった点、不十分だった点を言語化し、調整しながら学ぶことの意義を認識する。</li> <li>• 自身の学習スタイル（予習、授業、復習への向かい方）を見直し、友達を真似てみようと感じる経験をする。</li> </ul> |
| 5月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■スタサポ返却 = 学力 GTZ に対し、学習習慣がどうか確認</li> </ul>   | 5/2 英語<br>5/13 数学 | <ul style="list-style-type: none"> <li>• = 学習スタイルのよい生徒を教科担当者として担任で共有したい。</li> </ul>  |

同校では、「学年の様子」として、学校行事やLHR、模擬試験などに結びつけて、生徒の目指す姿を学年・月ごとに示している。それを踏まえて、「学びのアセスメント」で行うことを、右欄の「学びのアセスメントで確認したいこと/気づかせたいこと」として明記。各教科担当者は、それを基に、「学びのアセスメント」の自教科の年間計画を立てた。

※学校資料を基に編集部で作成。

図3 「学びのアセスメント」国語科の実施内容（抜粋）

ポイント

- 「言語文化」の確認の時間とする。
- 学習の展開に合わせて、次の3ステップを繰り返し、らせん状に発展させる。  
①基礎事項の徹底 ②ノートづくりを軸にした予習・復習の質の向上 ③『「言語文化」を学ぶ意味』を理解した上で、自ら問いを立て、相互に深める
- この時間のための事前学習は必要ないようにする（教科係主体で進めるため、全く準備をしていない生徒がいたとしても、その時間を運営できることが必須要件）

|         | 確認したい項目   | 内容   |
|---------|---|--|
| 第1回（4月） | <ul style="list-style-type: none"> <li>• やればできるはずのことができているか認識する。</li> <li>• 自身に定着するためにかかる時間や方法を認識する。</li> <li>• 自分なりに計画を立てて臨み、うまくいった点、不十分だった点を言語化し、調整しながら学ぶことの意義を認識する。</li> </ul> | 【サイクルI・ステップ1】①授業内容に準ずる小テスト（文法・単語等）を実施、②各自で採点した後、成果と課題を整理し、改善策を考える、③振り返りの結果をグループで共有、④個人で気づいたことをまとめる |

※学校資料を基に編集部で作成。

「地理総合」を受験科目とする基本方針を確認しつつ、3年次の選択科目について改めて検討している。

他者との対話から、自分にとってのよりよい学びを探る

同校にとって新たな活動となる「学びのアセスメント」の目標は、3年次までに、生徒が自分に必要

な学び方を自分で選び、学びを進められるようになることだ。その目標から逆算し、1年次のうちにできるようになってほしいことをイメージして年間計画（図2）を立て、それを基に、各教科が具体的な活動計画を作成した（図3）。

実施教科は、全教科の学習の土台となる国語・数学・英語で、毎時

間1教科とした。また、2年次の科

目登録に向けて、生徒に学ぶ意義を深く感じてほしいと考えた地理歴史・公民もスポットで実施した。

4月に実施した1回目は国語で、古文文法の小テストの結果から、個人で学習を振り返った後、グループで教え合いや、学習方法・動機づけの方法に関する意見交換を行った（図3）。他教科も同様の進め方で、他者の学び方や学びに

対する考えを聞くことで、自分にとってのよりよい学びを探っていく。

「学びのアセスメント」の進行役は、教科系の生徒が務める。各教科の教師から、事前にその時間の目標や大まかな流れについて指導を受けた後、教科係は、資料配布や説明の仕方、まとめの内容など、クラスに合った方法を考える。当日、教師は廊下から見守り、気づいた

点は、終了後に教科係に伝えるとともに、次の活動計画に生かす。1学年主任の飯島弘一郎先生は、教科係が重要な役割を担うと語る。

「活動の雰囲気づくりも、教科係が担っています。年度初めに教科係を決める際、その教科の成績が優秀でなくても、その教科が好きで、クラス全員でその教科の学習を深めていこうとする意欲のある生徒に教科係を務めてほしいと伝え、実際、そのような生徒が就きました。前期は、教師が準備をしていましたが、後期は、教科係に徐々に任せていく予定です」

「分らない」と言える、点数に一喜一憂しない生徒

「学びのアクセスメント」が始まって半年。生徒の学び方は変化しつつある。6月の調査では、自ら数学の予習をしてくる生徒が、例年に比べて多かった。「学びのアクセスメント」で学び方を学ぶ中で、予習の重要性に気づいたのではないかと、進路指導主事の滝本梨恵子先生は語る。学び合う集団づくりも、

例年より早く進んでいると言う。

「1年生のうちは、中学校時代からの小さなプライドがあり、『分からない』となかなか言えないのですが、『学びのアクセスメント』の時に、『分からない問題をしつくり教え合う経験をしているからか、クラス内で質問し合える関係が築かれつつあります。『分からない』と言い合えるムードを、生徒自身も喜びと受け止めています」

中村陸子副校長は、1年次前期の中間考査後の生徒の様子に、これまでとの違いを感じた。

「入学後初の考査では例年、点数のみを見て一喜一憂する生徒が大半ですが、今年度はそうした生徒が少なかったようです。『学びのアクセスメント』を通じて、考査は、できなかった点を把握し、学び方を振り返る機会だと、理解しようとする姿勢が見られます。そうした理解が今からあれば、2年次以降、模擬試験なども十分活用することができると、期待ができます」

「学びのアクセスメント」の効果検証と改善は、毎時間記入する振り返りシートや、授業アンケート

を基に行う予定だ。振り返りシートは、年度初めの記入内容と比較して、学習の悩みを具体的に把握することができるようになったか、自分で解決策を考えられるようになったかなどを見取り、その結果を生徒にフィードバックする形成的評価にも生かしていく。

すべての学びの言語化により「自立する18歳」に向かう

22年度入学生生教育課程では、探究学習に関する科目を増やした。1年次には、前期の「総合的な探究の時間」で、生徒が自分の関心をじっくり掘り下げ、自身で解決したい課題を見いだす機会を設けた。旧課程のその時間を実施していた探究手法の学習は、「理数探究基礎」を新設して行うことにした(図4)。2年次は、前期のみだった「総合的な探究の時間」を通年で設け、後期は、前期に取り組んだ個人探究を続けたり、チームで探究したりする時間として、探究のさらなる深化を目指す。「教科学習、探究学習、学校行

図4 1年次の探究学習に関する科目の構成

|             | 1年生 入学直後   | 前期  | 後期   |
|-------------|--|---|--|
| 「総合的な探究の時間」 | <b>探究 DIVE</b><br>入学後、丸2日間、どっぷり探究につかる。一見、手の出しようのない「問い」に「朋」とともに手と頭を使って答えを導き出していく。 | <b>探究基礎 HOP</b><br>自分自身の問題意識や興味を深める期間。探究の「愉しさ」を満喫しつつ、探究という営みが様々な場面で役に立つことを実感する。課題設定の方法について学ぶ。                                 | <b>探究基礎 STEP</b><br>自分の興味のある分野の少人数講座に所属し、具体的な課題の解決に向け、研究計画という戦術を立てられるようになるための期間。「常識」を「朋」と議論する。 |
| 「理数」        |  | <b>理数探究基礎</b><br>理数的な探究活動を複数回行うことで、探究の「型」(仮説実証の方法、研究倫理、数学・理科で学んだことの探究への応用)を身につける。国語力や論理的思考力も育成。文系を志望する生徒も、物理等の考え方を理解できるようにする。 |  |

※学校資料と取材を基に編集部で作成。

事等のすべての活動で、なぜ学び、どう試行錯誤して成長してきたのかを、生徒が言語化できるようにすることが、『自立する18歳』に向かう基礎となり、25年度大学入試を始めとするこれからの大学入試で求められる資質・能力の育成にも結実すると考えています(中村副校長)